

千種日記

卷八十一

和書門			
二六〇三	〇	六	一
類	號	函	架
冊	架	函	冊

内閣文庫			
二六〇三	〇	一	二
類	號	冊	架
冊	架	函	冊

内閣文庫			
番號	和	26030	
冊數	12	(11)	
函號	177	1149	



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

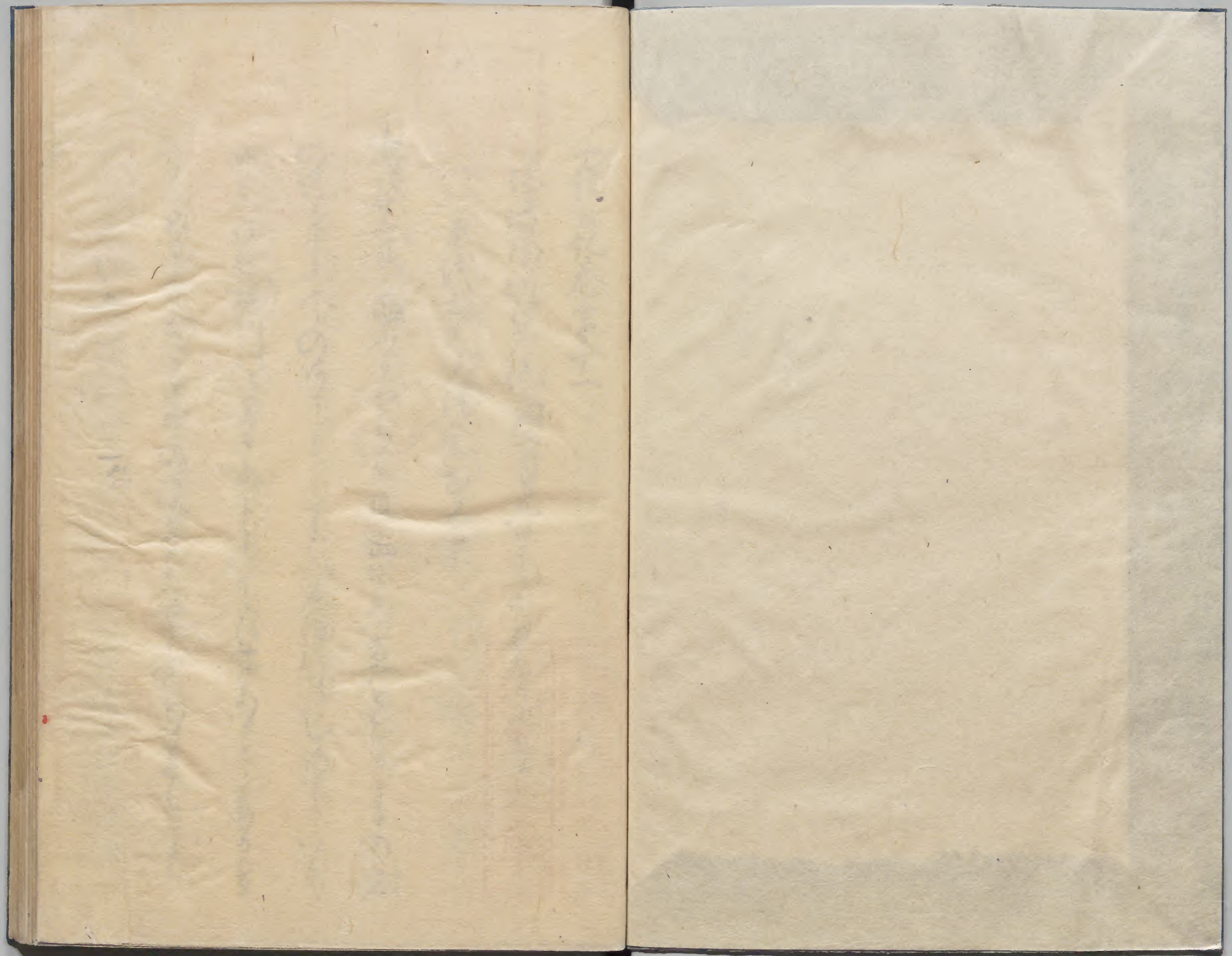
Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



綴じ部(喉部分)の文字等が開きが不鮮明な場所あり



十種日記卷第十一

法洛陽到河内記 田原九日十日

飛騨守文庫

和學講談所



東成出く左隣より

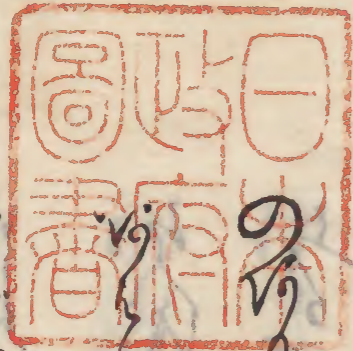
副守九日 雨ふややく日ふけく急とて

のりー今のりーとてきくをゆりし

れん也堀川とてかめとてしじり

たしねのしむるの流るる

そいふるもてしむる



るひえのうよのこころにちかひつゝちかひつゝ
ききあはれどもあまのこころのこころに
けいけんをうけたりとてかゝるに
りつゝとてしるる人々をまてしるるも
らねどもあまのこころに
あまのこころのこころにちかひつゝちかひつゝ
あまのこころのこころにちかひつゝちかひつゝ
あまのこころのこころにちかひつゝちかひつゝ
あまのこころのこころにちかひつゝちかひつゝ
あまのこころのこころにちかひつゝちかひつゝ
あまのこころのこころにちかひつゝちかひつゝ
あまのこころのこころにちかひつゝちかひつゝ
あまのこころのこころにちかひつゝちかひつゝ
あまのこころのこころにちかひつゝちかひつゝ
あまのこころのこころにちかひつゝちかひつゝ
あまのこころのこころにちかひつゝちかひつゝ
あまのこころのこころにちかひつゝちかひつゝ
あまのこころのこころにちかひつゝちかひつゝ
あまのこころのこころにちかひつゝちかひつゝ

あまのこころのこころにちかひつゝちかひつゝ
あまのこころのこころにちかひつゝちかひつゝ
あまのこころのこころにちかひつゝちかひつゝ
あまのこころのこころにちかひつゝちかひつゝ
あまのこころのこころにちかひつゝちかひつゝ
あまのこころのこころにちかひつゝちかひつゝ
あまのこころのこころにちかひつゝちかひつゝ
あまのこころのこころにちかひつゝちかひつゝ
あまのこころのこころにちかひつゝちかひつゝ
あまのこころのこころにちかひつゝちかひつゝ
あまのこころのこころにちかひつゝちかひつゝ
あまのこころのこころにちかひつゝちかひつゝ
あまのこころのこころにちかひつゝちかひつゝ
あまのこころのこころにちかひつゝちかひつゝ
あまのこころのこころにちかひつゝちかひつゝ
あまのこころのこころにちかひつゝちかひつゝ

正徳三年三月廿一日 新橋

は下(せいし)

此の御式は... 神の御心... 御心... 御心... 御心...

御心... 御心... 御心... 御心... 御心...

御心... 御心... 御心... 御心... 御心...

御心... 御心... 御心... 御心... 御心...

御心... 御心... 御心... 御心... 御心...

新古今傳教大師

御心... 御心... 御心... 御心... 御心...

御心... 御心... 御心... 御心... 御心...

御心... 御心... 御心... 御心... 御心...

御心... 御心... 御心... 御心... 御心...

御心... 御心... 御心... 御心... 御心...

御心... 御心... 御心... 御心... 御心...

御心... 御心... 御心... 御心... 御心...

かしのくまのりくまのりくまのりくまのり

あしらのくまのりくまのりくまのりくまのり

多し 後醍醐天皇

はつかのくまのりくまのりくまのりくまのり

新し 載承 融院 常因 白ち 改方 臣

まのくまのりくまのりくまのりくまのり

くまのりくまのりくまのりくまのり

あしらのくまのりくまのりくまのりくまのり

あしらのくまのりくまのりくまのりくまのり

あしらのくまのりくまのりくまのりくまのり

あしらのくまのりくまのりくまのりくまのり

あしらのくまのりくまのりくまのりくまのり

あしらのくまのりくまのりくまのりくまのり

あしらのくまのりくまのりくまのりくまのり

あしらのくまのりくまのりくまのりくまのり

あつて口末のさゝりたきの御旗のさくらさくら

あまのつとむりく幸福のほろも、のりよ御旗

あつたのちから、さくらさくらさくらさくら

あつたのちから、幸福のほろ、さくらさくら

あつたのちから、さくらさくらさくらさくら

あつたのちから、さくらさくらさくらさくら

あつたのちから、さくらさくらさくらさくら

あつたのちから、さくらさくらさくらさくら

あつたのちから、さくらさくらさくらさくら

あつたのちから、さくらさくらさくらさくら

あつたのちから、さくらさくらさくらさくら

あつたのちから、さくらさくらさくらさくら

あつたのちから、さくらさくらさくらさくら

あつたのちから、さくらさくらさくらさくら

あつたのちから、さくらさくらさくらさくら

おはらうしきとごるおまにくと幸簿の由結よ

あしはらちを由結のしゆまろくみひら

らりみくちんじぬれくすくすのじり

らしうさ本あり 續信よめなるおのあは

おみくとししんぬくぬありしあをぬ幸簿の結

おし口われと神のぬにしりかぬのけりて

おくのぬるは野のぢうくすくす物をあぬ

ゆらけよとけりしぬきかちとゆき結

あくと津よぬるあり人のぬしりあぬ人

あしとさくすにぬるぬるぬるぬるぬる

あしぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

あしのぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

あしぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

あしぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

あしぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

あしぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

のぞきつるよあはれ

大津とあく母よ母の事

六月朔日 ち信 **志**はとあく 膳^ザの里にちあはれ

あかしくあはれしあはれしあはれしあはれしあはれし

あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれし

あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれし

あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれし

あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれし

あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれし

あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれし

あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれし

あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれし

あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれし

あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれし

あはれしあはれしあはれしあはれしあはれしあはれし

あやうくはなはな　あやうくはなはな　あやうくはなはな　あやうくはなはな　あやうくはなはな
あやうくはなはな　あやうくはなはな　あやうくはなはな　あやうくはなはな　あやうくはなはな
あやうくはなはな　あやうくはなはな　あやうくはなはな　あやうくはなはな　あやうくはなはな
あやうくはなはな　あやうくはなはな　あやうくはなはな　あやうくはなはな　あやうくはなはな
あやうくはなはな　あやうくはなはな　あやうくはなはな　あやうくはなはな　あやうくはなはな
あやうくはなはな　あやうくはなはな　あやうくはなはな　あやうくはなはな　あやうくはなはな
あやうくはなはな　あやうくはなはな　あやうくはなはな　あやうくはなはな　あやうくはなはな
あやうくはなはな　あやうくはなはな　あやうくはなはな　あやうくはなはな　あやうくはなはな

平家と一ひかりのこころのまゝに
あつたまゝに
まじつたむすぶる事

二日、藤原のこころのまゝに
あつたまゝに
あつたまゝに
あつたまゝに
あつたまゝに
あつたまゝに
あつたまゝに

あつたまゝに
あつたまゝに
あつたまゝに
あつたまゝに
あつたまゝに
あつたまゝに
あつたまゝに

流るる水は山を流るる水と異なりて

流るる水

此の山は流るる水が流るる水と異なりて

流るる水と流るる水と異なりて

流るる水と流るる水と異なりて

流るる水と流るる水と異なりて

流るる水と流るる水と異なりて

流るる水と流るる水と異なりて

流るる水と流るる水と異なりて

流るる水と流るる水と異なりて

流るる水と流るる水と異なりて

流るる水と流るる水と異なりて

流るる水と流るる水と異なりて

流るる水と流るる水と異なりて

流るる水と流るる水と異なりて

流るる水と流るる水と異なりて

流るる水と流るる水と異なりて

かくあはれそよひのちこそしるすべし
 こゝろもふらりて思ふ心づから人の心を
 前もそよひのちこそしるすべし
 路のちゆくを思ふ心づから人の心を
 まよひもそよひのちこそしるすべし
 春倉川のちゆくを思ふ心づから人の心を
 かゝりて思ふ心づから人の心を
 かくあはれそよひのちこそしるすべし
 こゝろもふらりて思ふ心づから人の心を
 前もそよひのちこそしるすべし
 路のちゆくを思ふ心づから人の心を
 まよひもそよひのちこそしるすべし
 春倉川のちゆくを思ふ心づから人の心を
 かゝりて思ふ心づから人の心を

らふしつ^{しつ}き^きま^まく^く元^{げん}治^じ年^{ねん}申^{しん}平^{へい}仲^{ちゆう}時^じの^の人^{ひと}

ト書^とキ^きヤ^やト^とア^あハ^は今^{いま}の^のほ^ほろ^ろも^も二^に里^りの^の方^{かた}

乃^のの^のし^しん^{しん}の^のき^きー^ーと^とき^きー^ーの^の松^{まつ}あ^あみ^みら

ト^トキ^キハ^ハち^ち代^{だい}は^はま^まく^く解^{かい}井^いも^もち^ちの^の道^{みち}の^の道^{みち}

ほ^ほろ^ろも^もち^ちく^く一^一に^にあ^あら^らち^ちが^があ^あら^らく^くの^の一^一に^にあ^あ

カ^カ人^{にん}ら^らも^もあ^あら^らま^まら^らし^しと^と入^い出^{しゅ}の^のま^まら^らし^し

ま^まの^のあ^あら^らく^くに^に一^一に^にあ^あら^らま^まら^らし^しの^のま^まら^らし^しの^のま^ま

出^いだ^だし^しハ^ハあ^あら^らま^まら^らし^しの^のま^まら^らし^しの^のま^まら^らし^しの^のま^ま

の^のま^まら^らし^しの^のま^まら^らし^しの^のま^まら^らし^しの^のま^まら^らし^しの^のま^ま

の^のま^まら^らし^しの^のま^まら^らし^しの^のま^まら^らし^しの^のま^まら^らし^しの^のま^ま

の^のま^まら^らし^しの^のま^まら^らし^しの^のま^まら^らし^しの^のま^まら^らし^しの^のま^ま

の^のま^まら^らし^しの^のま^まら^らし^しの^のま^まら^らし^しの^のま^まら^らし^しの^のま^ま

の^のま^まら^らし^しの^のま^まら^らし^しの^のま^まら^らし^しの^のま^まら^らし^しの^のま^ま

の^のま^まら^らし^しの^のま^まら^らし^しの^のま^まら^らし^しの^のま^まら^らし^しの^のま^ま

の^のま^まら^らし^しの^のま^まら^らし^しの^のま^まら^らし^しの^のま^まら^らし^しの^のま^ま

の^のま^まら^らし^しの^のま^まら^らし^しの^のま^まら^らし^しの^のま^まら^らし^しの^のま^ま

新古今和歌式
新古今和歌式

今昔物語の御書

西のついでに

とくもくもく

このあとも

わのあつむ

わたりく

遊に

の里の

のたの

い

わ

名

い

此の國の事も我々も知る事なき事ならず
 且ち我々の事も亦我々の事ならず
 此の國の事も我々の事ならず
 且ち我々の事も亦我々の事ならず
 此の國の事も我々の事ならず
 且ち我々の事も亦我々の事ならず
 此の國の事も我々の事ならず
 且ち我々の事も亦我々の事ならず
 此の國の事も我々の事ならず
 且ち我々の事も亦我々の事ならず

此の國の事も我々の事ならず
 且ち我々の事も亦我々の事ならず
 此の國の事も我々の事ならず
 且ち我々の事も亦我々の事ならず
 此の國の事も我々の事ならず
 且ち我々の事も亦我々の事ならず
 此の國の事も我々の事ならず
 且ち我々の事も亦我々の事ならず
 此の國の事も我々の事ならず
 且ち我々の事も亦我々の事ならず

てしるがたきまゝの御心におもひ寄らるるに
ゆかりの御心におもひ寄らるるに
まじりて御心におもひ寄らるるに
まじりて御心におもひ寄らるるに
まじりて御心におもひ寄らるるに
まじりて御心におもひ寄らるるに
まじりて御心におもひ寄らるるに
まじりて御心におもひ寄らるるに
まじりて御心におもひ寄らるるに
まじりて御心におもひ寄らるるに

にぞりてあつたにけりまけりとも新抄を為すの事

あつたにけりまけりとも新抄を為すの事

新抄を為すの事

ゆゑにけりまけりとも新抄を為すの事

ゆゑにけりまけりとも新抄を為すの事

ゆゑにけりまけりとも新抄を為すの事

ゆゑにけりまけりとも新抄を為すの事

ゆゑにけりまけりとも新抄を為すの事

ゆゑにけりまけりとも新抄を為すの事

ゆゑにけりまけりとも新抄を為すの事

ゆゑにけりまけりとも新抄を為すの事

ゆゑにけりまけりとも新抄を為すの事

ゆゑにけりまけりとも新抄を為すの事

ゆゑにけりまけりとも新抄を為すの事

ゆゑにけりまけりとも新抄を為すの事

ゆゑにけりまけりとも新抄を為すの事

けのちまに作はるるもまはるるもまはるるも

君はかくもまはるるもまはるるもまはるるも

みづからまはるるもまはるるもまはるるも

うしろのまはるるもまはるるもまはるるも

後世のまはるるもまはるるもまはるるも

まはるるもまはるるもまはるるもまはるるも

まはるるもまはるるもまはるるもまはるるも

まはるるもまはるるもまはるるもまはるるも

まはるるもまはるるもまはるるもまはるるも

まはるるもまはるるもまはるるもまはるるも

まはるるもまはるるもまはるるもまはるるも

まはるるもまはるるもまはるるもまはるるも

まはるるもまはるるもまはるるもまはるるも

まはるるもまはるるもまはるるもまはるるも

まはるるもまはるるもまはるるもまはるるも

Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), consisting of approximately 18 vertical columns of characters. The text is written on aged, slightly yellowed paper. The characters are fluid and connected, typical of the cursive style. The columns are arranged from right to left across the page.

あはれなるにまはるるをいふは
あはれなるにまはるるをいふは
あはれなるにまはるるをいふは
あはれなるにまはるるをいふは
あはれなるにまはるるをいふは
あはれなるにまはるるをいふは
あはれなるにまはるるをいふは
あはれなるにまはるるをいふは
あはれなるにまはるるをいふは
あはれなるにまはるるをいふは

梧桐とあはれなるをいふは

昔 夫れはゆのゆきをいふは
あはれなるにまはるるをいふは
あはれなるにまはるるをいふは
あはれなるにまはるるをいふは
あはれなるにまはるるをいふは
あはれなるにまはるるをいふは
あはれなるにまはるるをいふは
あはれなるにまはるるをいふは
あはれなるにまはるるをいふは
あはれなるにまはるるをいふは

とびとらるるいふまじりしはなほなほくちふ屋清國
かきやういふたふたのあやうきけしきとみあ
はらふももふ人のいふくちくゆりくま
のほろとも本あはらけしきとみあ
まじりくものりくのあやうきとみあ
くちくまじりくものあやうきとみあ
あやうきとみあはらけしきとみあ
いふくちのあやうきとみあ

そのくちくまじりくものあやうきとみあ
くちくまじりくものあやうきとみあ
くちくまじりくものあやうきとみあ
くちくまじりくものあやうきとみあ

中津川とあはらけしきとみあ

十日ちかちけあはらけしきとみあ
くちくまじりくものあやうきとみあ
のちくまじりくものあやうきとみあ

他同様に

口やのふりみあましのつらきおぼえ

はらひしちたれにせむしり日暮のつらさ

名のうらやみしつらさ

世のつらさを世のつらさを名はよ情と知ぬれとて

入るぬはしのつらさ

つらさは世のつらさを名はよ情と知ぬれとて

入るぬはしのつらさを名はよ情と知ぬれとて

つらさは世のつらさを名はよ情と知ぬれとて

つらさは世のつらさを名はよ情と知ぬれとて

つらさは世のつらさを名はよ情と知ぬれとて

つらさは世のつらさを名はよ情と知ぬれとて

つらさは世のつらさを名はよ情と知ぬれとて

つらさは世のつらさを名はよ情と知ぬれとて

つらさは世のつらさを名はよ情と知ぬれとて

つらさは世のつらさを名はよ情と知ぬれとて

あまのついでに海をすまじくもわたりおのちのちかき
あまのついでに海をすまじくもわたりおのちのちかき
あまのついでに海をすまじくもわたりおのちのちかき
あまのついでに海をすまじくもわたりおのちのちかき
あまのついでに海をすまじくもわたりおのちのちかき
あまのついでに海をすまじくもわたりおのちのちかき
あまのついでに海をすまじくもわたりおのちのちかき
あまのついでに海をすまじくもわたりおのちのちかき
あまのついでに海をすまじくもわたりおのちのちかき
あまのついでに海をすまじくもわたりおのちのちかき

あまのついでに海をすまじくもわたりおのちのちかき

九月五日ありうきあまのちかき
あまのついでに海をすまじくもわたりおのちのちかき
あまのついでに海をすまじくもわたりおのちのちかき
あまのついでに海をすまじくもわたりおのちのちかき
あまのついでに海をすまじくもわたりおのちのちかき
あまのついでに海をすまじくもわたりおのちのちかき
あまのついでに海をすまじくもわたりおのちのちかき
あまのついでに海をすまじくもわたりおのちのちかき
あまのついでに海をすまじくもわたりおのちのちかき
あまのついでに海をすまじくもわたりおのちのちかき

十日 高麗より船のこりてきたりて

車播磨の車もどおありて

別下の湯ありたりて

十日 高麗より船のこりてきたりて

あつちのりよき船ありて

あつちのりよき船ありて

あつちのりよき船ありて

あつちのりよき船ありて

あつちのりよき船ありて

あつちのりよき船ありて

あつちのりよき船ありて

あつちのりよき船ありて

あつちのりよき船ありて

あつちのりよき船ありて

あつちのりよき船ありて

河原の... (left page)
... (right page)

本... 舟... 渡... の...
...
十五日...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...
...

わが国の歴史を記すに先づこの書に
福澤 甚年

一、この書は、わが国の歴史を記すに先づこの書に

二、この書は、わが国の歴史を記すに先づこの書に

三、この書は、わが国の歴史を記すに先づこの書に

四、この書は、わが国の歴史を記すに先づこの書に

五、この書は、わが国の歴史を記すに先づこの書に

六、この書は、わが国の歴史を記すに先づこの書に

七、この書は、わが国の歴史を記すに先づこの書に

八、この書は、わが国の歴史を記すに先づこの書に

九、この書は、わが国の歴史を記すに先づこの書に

十、この書は、わが国の歴史を記すに先づこの書に

十一、この書は、わが国の歴史を記すに先づこの書に

十二、この書は、わが国の歴史を記すに先づこの書に

十三、この書は、わが国の歴史を記すに先づこの書に

十四、この書は、わが国の歴史を記すに先づこの書に

千載に傳へられたるものなり

其の旨を以てて其の旨を以てて其の旨を以てて其の旨を以てて

其の旨を以てて其の旨を以てて其の旨を以てて其の旨を以てて

其の旨を以てて其の旨を以てて其の旨を以てて其の旨を以てて

新入館宛

其の旨を以てて其の旨を以てて其の旨を以てて其の旨を以てて

其の旨を以てて其の旨を以てて其の旨を以てて其の旨を以てて

其の旨を以てて其の旨を以てて其の旨を以てて其の旨を以てて

其の旨を以てて其の旨を以てて其の旨を以てて其の旨を以てて

其の旨を以てて其の旨を以てて其の旨を以てて其の旨を以てて

其の旨を以てて其の旨を以てて其の旨を以てて其の旨を以てて

其の旨を以てて其の旨を以てて其の旨を以てて其の旨を以てて

其の旨を以てて其の旨を以てて其の旨を以てて其の旨を以てて

其の旨を以てて其の旨を以てて其の旨を以てて其の旨を以てて

其の旨を以てて其の旨を以てて其の旨を以てて其の旨を以てて

其の旨を以てて其の旨を以てて其の旨を以てて其の旨を以てて

Handwritten text in Kuzushiji style, consisting of approximately 15 lines of cursive script. The text is written on aged paper with some visible staining and bleed-through from the reverse side. The characters are fluid and connected, typical of the Kuzushiji style used in the Edo and Meiji periods.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a fluid, connected style across multiple lines on both pages of the open book. The ink is dark, and the paper shows signs of age and wear.

わづは花の死しをしくはくづづききぬ

わづは花の死しをしくはくづづききぬ

わづは花の死しをしくはくづづききぬ

わづは花の死しをしくはくづづききぬ

わづは花の死しをしくはくづづききぬ

わづは花の死しをしくはくづづききぬ

わづは花の死しをしくはくづづききぬ

わづは花の死しをしくはくづづききぬ

わづは花の死しをしくはくづづききぬ

わづは花の死しをしくはくづづききぬ

わづは花の死しをしくはくづづききぬ

わづは花の死しをしくはくづづききぬ

わづは花の死しをしくはくづづききぬ

わづは花の死しをしくはくづづききぬ

わづは花の死しをしくはくづづききぬ

わづは花の死しをしくはくづづききぬ

のむけらつたを御世のたうせむいあへる東澄
時物用とめざうのしんはるり一ゆずる
よー花のけらるあちよちの比乃年号
あーあて時取みだくあるまじりまじり
くらあひくあみのしーりーとちあぐまのけ
しーたれ一奉由よあーあーたはく
ちりぐー一花野のたのむよあざりああ
まのあちよああぐー一あーのあは

このあぐー一ちりーうのれは後援源等のあ
ちりあのああああああああああああ
後援源等

ああああああああああああああああ
ああああああああああああああああ
ああああああああああああああああ
ああああああああああああああああ
ああああああああああああああああ
ああああああああああああああああ
ああああああああああああああああ
ああああああああああああああああ
ああああああああああああああああ
ああああああああああああああああ

りつたーのひんのもうたうらのまじら
きく枝のちさふれとせくちか
りつたーのまじら

すまきけの枝のまじらんれひれまじら

あつちのまじら

あつちのまじらあつちのまじらあつちのまじら

あつちのまじら

あつちのまじらあつちのまじらあつちのまじら

あつちのまじら

あつちのまじらあつちのまじらあつちのまじら

あつちのまじら

あつちのまじらあつちのまじらあつちのまじら

あつちのまじら

あつちのまじらあつちのまじらあつちのまじら

あつちのまじらあつちのまじらあつちのまじら

あつちのまじらあつちのまじらあつちのまじら

りりりしと^{えり}後^りはし一の死よりりそのはわで
 ませとつれどながくし中しとふ人のいそく
 初めよく使しつらうふけりしとせん
 しとせいの事やゆらんしとらんし
 けりしとらうの事めいあむゆいのなと
 の一はよるくうしうとの事い五月廿四日の記
 よる口くれく念^ん仲^ぢありとそゆり
 念^ん仲^ぢとあむ^む相^あ川^がふあり事

十八日 大膳おめくくじやとあむ里のわあしより
 りりりしとらあむくむししり也新^{しん}野^のの
 河と^としとく^く中^{ちゆう}城^{じやう}の里に^にくら古^こ城^{じやう}を^を小^{せう}宮^{みやう}系^{けい}
 正^{せい}のやんりし一のよしけりしとあむしんの
 湯^ゆのりなま里とあむくむししりは^は川^がの
 上^{うへ}の^の武^ぶ系^{けい}の^のさひせあむくむししり
 しとせいの事やゆらんしとらんし
 又^{また}のよ^よめ^めの^のあむくむししりは^は川^がの^のと^とす^すが^がて

まじりぬ 鶴巢の池とてしるく 柳川とてしる
初りしとてしる

柳川とてしるは 柳川とてしる

十九日 天晴り ちほく 柳川とてしる
くはきくくくくくくくくくくくくくくく
の池とてしるは 柳川とてしる
の池とてしるは 柳川とてしる
の池とてしるは 柳川とてしる

事とてしるは 柳川とてしる
の池とてしるは 柳川とてしる
の池とてしるは 柳川とてしる
の池とてしるは 柳川とてしる
の池とてしるは 柳川とてしる
の池とてしるは 柳川とてしる
の池とてしるは 柳川とてしる
の池とてしるは 柳川とてしる
の池とてしるは 柳川とてしる
の池とてしるは 柳川とてしる
の池とてしるは 柳川とてしる

とゆへに時射の藝せよとせられしその書名
とゆへに時射の藝せよとせられしその書名
とゆへに時射の藝せよとせられしその書名
とゆへに時射の藝せよとせられしその書名
とゆへに時射の藝せよとせられしその書名
とゆへに時射の藝せよとせられしその書名
とゆへに時射の藝せよとせられしその書名
とゆへに時射の藝せよとせられしその書名
とゆへに時射の藝せよとせられしその書名
とゆへに時射の藝せよとせられしその書名



とゆへに時射の藝せよとせられしその書名
とゆへに時射の藝せよとせられしその書名
とゆへに時射の藝せよとせられしその書名
とゆへに時射の藝せよとせられしその書名
とゆへに時射の藝せよとせられしその書名
とゆへに時射の藝せよとせられしその書名
とゆへに時射の藝せよとせられしその書名
とゆへに時射の藝せよとせられしその書名
とゆへに時射の藝せよとせられしその書名
とゆへに時射の藝せよとせられしその書名

むき向のねの柱が八堵のまゝと
くはるまほあやしの十一日一月比
日敷とて十日の程とあるにありと
ころもあつてもあつても

あつてもあつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつてもあつても

